

# 癒しのサンマ(時間・空間・仲間)と若き旅人たち

## —地域若者文化のはぐくみ方—

西村美東士

はじめに

—癒される地域文化  
創出の可能性—

ここでは、文化としてのコミュニケーション  
ションやその他の文化活動がどのように  
あれば、現代の若者たちに心からの癒し  
を与えられるのか、そして、そのこと  
によって、文化の継承や建設的な対抗文化  
としての役割を若者文化が果たせるよう  
になるのか、考えることにする。その際、  
地域だからこそ期待できる可能性とは何  
なのか、ということが重要になる。

従来の教育は、ややもすると対抗文化  
の発展を妨げる一方、青少年個人には成

長・発達ばかりを期待してきた。しかし、  
学校歴偏重、上下競争主義の弊害がここ  
まで来た今日、非効率的に見えようとも、  
癒しや安らぎを得ることのできるサンマ  
を広げていくことに力を入れることの方  
が先決である。

サンマとは時間、空間、仲間の三つの  
マ(間)のことで、本来は、子ども会関  
係者などが、今の子どもにとって「遊び  
のサンマ」が欠けていると提起したとき  
の言葉である。しかし、若者や大人たち  
はどうだろうか。子どもたちと同様にサ  
ンマの不足にあえいでいるではないか。  
ゆっくりしたい、自分らしさを取り戻し  
たい、本当の友達がほしい……(自著、癒

しの生涯学習—ネットワークのあじわい  
方とはぐくみ方—平成九年四月、学文  
社、参照)。

地域は、その実態はともかく、本来的  
には縦よりも横の関係が基調になる場  
である。それゆえ、文化活動においても、  
上からの命令ではない自己決定と、対等  
な人間的交流が基盤になり、文化創造を  
含めた自己決定活動の主人公として活躍  
する余地の大きい場の「はず」である。  
だとすれば、地域文化は「癒しのサンマ」  
に支えられ、そのサンマをより確かな信  
頼と共感に基づくものにしてくれる「は  
ず」だろう。

「はず」であるのに、地域の実態がそ

うではないとすれば、今の若者を責める前に、地域自体の意識的な変革によって、これを少しでも、あるいは突出的にでも、改善していくことが大切ではないか。以下、サンマの視点に基づいて、そのための提案をする。

### 地域に囲い込

もうとしないで

—若き旅人たちの巣立ちの場—

ぼくが関わっていた東京都狛江市中央公民館の青年教室「狛江ブローロー教室」(通称狛江ブロー)では、他市、他県からも若者がやってくる。その若き旅人たちが口をそろえて言う、「ジモティーはラツキーだなあ」。ジモティーとは地元民のことである。夜、遅くまでいても、楽に帰宅できるのがうらやましいのだ。ジモティーとしても「狛江っていいところだよ」とまんざらでもなさそうだ。実際、職場から遠くなるのに、狛江に引越してきてしまったメンバーさえいる。しか

し、彼らとして、また、いつ巣立ってしまいかはわからない。

地域に対する若者の愛着や帰属意識は、こんなところで十分だと思う。「みずからが居住する地域で活動しないなんて」と考えるのは、「若者にとって地域とは」というのではなく、「地域のために若者をどう活用するか」という逆立ちした発想である。これに似た逆立ちが、もうひとつある。「この地域で育ったのだから、この地域に還元するための活動を」という地域からの若者への押しつけである。

地域自身もつとオーブンマインド(開かれた心)を取り戻す必要がある。

ノリを押しつけないで

—鬱の時代の  
「個の深み」—

東京都青少年センターの運営会議で、ぼくがあるにぎやかなイベントを提案したところ、同じく委員をしていた狛江ブロー

の前衛芸術の女性講師から、「西村さんね、いまの時代の気分は「鬱」なのよ」と言われた。たしかに、鬱の時代のパブリックな空騒ぎにはみんな飽き飽きしているようだ。

ぼくのメーリングリスト(インターネットを利用したグループ内での手紙のやり取り)に参加しているある若者の発言(概要)を聞いてほしい。

「実行委員とかいう言葉には、なぜか拒絶反応がでるんですよ。どうも、大学の時の学園祭実行委員会(三自治会)のイメージが強くて……。なんというか、単一のノリしか認められないような感じとでもいうんでしょうか。結局、今の自分のノリがその集団のノリとあうようなんじゃないと定着しないんですよ。そしてますますその集団内部で閉じた世界ができちゃって、強化されていく。その最悪なところは、彼らのノリでの参加を強要されてしまうことです」。

このように個を大切に現在の若者

が求めている出会いとは、一人ひとりの「個の深み」（自著『生涯学習か・く・ろ・ん』学文社、平成三年四月）と静かに対面し、しみじみと体験を味わえるサンマでの出会いなのだろう。

ノリは、結局は「視線」を獲得するための行為につながっているようだ。それはそれでよい。しかし、鬱の時代には、もっと意味を込めた「まなざし」こそを求める若者が増えているのではないか。ノリに無理して付き合うことなく、かといって乱暴にならずに自己の鬱を大切に扱って生きている若者に対して「まなざし」を投げかける地域や文化であってほしい。

## 個人としてとらえて

### — 学習は個人的事象 —

同じメーリングリストから。

「以前、大阪にいる頃はハードロックバンドを組んでライブハウスを回ってい

ました。今の仕事を始めてからは音楽から離れていたのですが、最近またバンドを組み、ギターも習いはじめました。ゴキゲンな毎日です。団体行動は苦手。でも楽しいお酒は好きです。仲良くしてください。」

ほくは次のようなレスポンス（反応の投稿）を出した。

「そうなんです。このメーリングリストでもそういう人が多くて……。でも、こはイベントバリバリの人たちも水平に交流するという特異な場だと思います。なんだかおもしろいですよね。」

指導者は、表面的には集団を相手にしているても、心底そう思いこむようになつたら大間違い。学習は本質的には個人的事象であり、教育はその異なる学習者一人一人に働きかけていく営みである。文化活動もそうだろう。「みんな違ってみんないい」（金子みすゞ「わたしと小鳥とすずと」）のである。

## 紳士淑女としてとらえて

— 青年は保護や管理の対象ではなく自己決定主体 —

子どもは子どもと呼べばいい。しかし青年を、青年と呼ぶか、若者と呼ぶか、ほくは現在、ほかのメーリングリストで論議中だが（一応のほくかなりの結論はひらがなの「わかもの」である）、少なくとも中学生を過ぎたら、どう呼ぶかは別として、「まだ子ども」ではなく、「もう大人」として接し、「若い大人」すなわち「ヤングアダルト」としてとらえるよう主張したい。

「子ども」と呼ばれるのではなく、「知る権利」などを保有し、よって責任があるという意味での「アダルト」と呼ばれることによって、そう呼ばれた人自身が、保護と管理のもとに置かれ続けすぎた「子ども」ではなく、自己決定する「成人」になることができる。場合によっては、子どもに対してだって「紳士淑女」

として扱えばいいではないか。

## 後向きを否定しない

—積極・消極の

自己決定の尊重—

よくいわれることで、「最近の若い人は積極性がない」、「気まぐれで信用できない」というのがある。しかし、注意深く個人を見てほしい。必ずしも、いつも後向きというわけではない。逆に、大人だって、だれだって、どんな状況でも積極的などという人はいない。もし、いるとしたら、その人はむしろ積極、消極を自己決定できていないとさえいえるかもしれない。

自己決定活動のエネルギー消費について、ふたたびメーリングリストから。

「やりたくてやること(楽しいこと)

に使うエネルギーと、あんまり乗り気じゃないけどやらないといけないからやること(楽しくないこと)に使うエネルギーがある。たとえば、人に会いに行つて、

かえつてうまくいかなくて落ち込んだりする。それをまた、しばらくして気を取りなおして、違う人に会いに行くと、そんな感じのときのことです。

人に会いに行く…エネルギー消費量・小/気分・楽しい。↓落ち込んだけど、気を取りなおす…エネルギー消費量・大/気分・楽しくない。↓違う人に会いに行く…エネルギー消費量・やや大/気分・やや楽しい」。

この「気を取りなおす」前の落ち込みにあるとき、それを静かに受けとめている彼は、たとえ外からは後向きに見えるようとも、個の深いプロセスにいるのである。そういうときは、鞭を飛ばしたりせずに、そつとしておいてあげてほしい。

違う若者のメーリングリストから。今度は女性。しなやかでたくましい。

「エネルギーの流出に神経質になると、小さなことに感動できるようになります。道端の花の色だとか、空気に混じる匂いだとか、友達が何気なくいった言葉

だとか。そうした感動をコツコツため込んでいるうちに、ある日いきなり復活の日が訪れます。復活の呪文はたいてい、「あーっ、もう、めんどくさい!」。何のことはない、落ち込んでいる自分自身に飽きるのです。どんな状況でも面白がることさえできれば、パワーに変換できるんだなと思います」。

後向きになっているときも個人にとつての「文化」の契機なのだ。また、森田正馬の臨床心理学では、彼女のいう「ある日いきなりの復活」を「流転」と呼び、「気になることは気にすればよい」と説いている。状況による後向きというのは、じつは建設的な生き方のひとつなのである。

## 教育つばくはないのが好き

—双方向ライブこそ教育  
や地域若者文化の姿—

ある青少年センターの若手スタッフが、違うメーリングリストで次のように

発言していた。

「よく利用者や関係職員には『教育っ  
ぱくなくていいよね』とか、『なんでそ  
んな事業ができるの』っていわれること  
があります」。

ぼくは次のようにレスポンスした。

「センターの事業は教育じゃないから  
なんででしょうね。社会『教育』の世界の  
ぼくとしては悔しいです。でも、教育に  
対する固定観念に安住している人が教育  
をやっていると、マイナスとしての『教  
育っばさ』が生ずるのであって、ほんとう  
は教育は『教育っばい』ものではない  
と思います（矛盾した表現！）。

たとえば、校長が朝礼台に立つのは、  
数百人もの子どもたちから見えやすいよ  
うにという配慮であるはずであって、も  
し、これが過疎の村の数人の学校でも同  
じようにやっているとしたら、教育者とし  
ての見識が疑われるわけです。幸いにも  
そんなに小人数なら、子どもたちの視  
点まで降りていって、まさに双方向リア

ルタイムのおしゃべりをすればよい。そ  
ういうライブ（生演奏）感覚こそがほん  
とうは『教育っばい』姿なのだと思います。  
す。

それにしても、朝礼って、なんだか教  
育の代表的存在みたい。あれって、やら  
れるほうはコケにされてるみたいでたま  
らなく嫌なものが、やっているほう  
はめっちゃくちゃ快感感じてるんでしょ  
うね。ずるいよねえ」。

同じ彼が次のように、ふたたびレスポ  
ンスしてきた。

「私個人の話で恐縮ですが、私が中学  
校の教壇に立ってたときより、今の仕事  
の方がおもしろいです。なぜか？ ある意  
味、無責任だから楽なんでしょねえ。  
マイナスとしての教育っばさ〓説得、と  
いうイメージがあるんでしょか」。

ぼくは次のように返した。

「説得じゃないでしょうね。だって、  
ぼくだったら、いっしょうけんめい包み  
隠さずに、真正面からぼくを説得しよう

とする人がいたら、その人の言葉を少な  
くともよく聴きたいとは思うもの。ただ  
し、最後に決めるのは自分ですけど。

マイナスとしての教育っばさ〓説得、  
ではなくて、〓説教、なんででしょう。自  
分の本音や心配事は隠しておいて、なん  
の痛みや悩みも感じてないふりをして、  
とくとくと朝礼台から語られることを聞  
く側の苦痛、というか馬鹿馬鹿しさ、こ  
れが、マイナスとしての教育っばさなの  
だと思います」。

以上は教育についての話題ではある  
が、文化活動、とくに地域文化において  
も、まったく同じことがいえるのではな  
いか。文化を享受する側が個人として大  
切に扱われる。ときには双方向の参加が  
可能である。決まりきったことを上から  
押しつけられることだけでは、けっして  
個人は我慢できないのである。

中・高年みずからが地域  
文化を楽しまなくっちゃ

—「今しかここだけしか」から「今ここで」へ—

狛プーで紙芝居教室をやったとき（狛プーは月替りメニューである）、講師の紙芝居屋さんのおじいさんの態度がとても魅力的だった。参加者が一人一人順番にアドリブで紙芝居（本物の）をやっているときさえも、講師本人は自分の紙芝居の準備に熱中している。もちろん、言葉少なく的確な専門的アドバイスをしてはくれるのだが、基本的にはそのおじいさんは「好きでやっている」だけなのである。だから、太極拳だかなんだか、関係ないけれど自分がいま関心を持っている話題については一生懸命しゃべる。こういう「自然体」で「ほんもの」の生き方に、若者は憧れるのである。

地域の心ある大人たちが危機感に駆られて、しかもついでで「滅びゆく地域文化を継承しなければならない」と訴えたとしても、多くの若い旅人たちは自己決定

してまではついてきてはくれないだろう。失礼な言い方で恐縮だが、その言葉に「うそ」が混じっているように感じられるからである。

それよりも、少しでも多くの中高年たち自身が、地域文化をみずから楽しみ、地域の横のつながりによって生ずる癒しのサンマにみずから癒される思いをもてるようになることこそ大切なのではないか。

「今ここで」あるいは「今を生きる」という言葉がある。学歴などの過去の文化遺産を比べあったり、「次の世代のために」と演説したりすることより、「今ここで」の自他の個の深みとの出会いこそ、若者も中高年も心の奥底では求めていることなのだろう。「今ここで」は文化の本質でもあろう。

しかし、現代文明がここに来て至って、「今ここで」ではなくて、「今しかここだけしか」（どうせ将来は自己決定の生き方など無理だから）という絶望的な時

代の気分が高校生などの若者たちを支配しているように思える。地域文化創造の主人公になるなどという意識が芽生えないのも無理はない。

そういうとき、中高年こそ、「落ち込んで自己自身に飽きて」、いわば居直って、「いつでも、どこでも、だれでも、なんでも」の生涯にわたる「今ここで」の文化の楽しみ方を示すことができるのではないか。地域文化活動等の横のつながりによる自己決定活動に限っては、主体的、意識的な営みさえあれば、それはすぐ手の届くところにあると思う。そういう中高年たちが地域にいれば、若者にとってはたまたまなく魅力的な姿に映ることだろう。

（にしむら みとし

徳島大学開放実践センター助教授）

メーリングリスト [niochan-meta@mlml.nc.jp](mailto:niochan-meta@mlml.nc.jp)

ホームページ <http://ha5.seikyone.jp/home/niochan/>

ファックス 0885-26-8007（24時間受信可）